

(トップページ: <http://mylibrary.maeda1.jp/>)

(GDP (IMF WEO) : <http://mylibrary.maeda1.jp/GDP.html>)

マイライブラリー:0564

(注)本稿は 2022 年 8 月 12 日から 15 日まで 3 回に分けて「アラビア半島定点観測」に掲載したレポートをまとめたものです。

2022.8.18

前田 高行

IMF 世界経済見通し:不透明感増し再度下方修正された今年と来年の成長率

IMF(国際通貨基金)が「世界経済見通し(World Economic Outlook Update)」を発表した。このレポートでは全世界、EU、ASEAN などの主要経済圏及び主な国々の今年と来年の GDP 成長率が開示されている。

本稿では今回のレポートによる今年(2022 年)及び来年(2022 年)の世界、主要経済圏、主要国の成長率を比較し、また前回 4 月の経済見通しに対して GDP 成長率がどのように見直されたかを検討する。さらに 2022 年 1 月及び 2021 年 10 月のデータも参照し、これら 4 回のレポートを通じて 2022 年の GDP 成長率がどのように見直されてきたかを精査する。

* WEO レポート:

<https://www.imf.org/en/Publications/WEO/Issues/2022/07/26/world-economic-outlook-update-july-2022>

(同日本語版)

<https://www.imf.org/ja/Publications/WEO/Issues/2022/07/26/world-economic-outlook-update-july-2022>

(世界の成長率 3.2%、ほぼ全ての国で前回、前々回の見通しを下方修正！)

1. 2022 年の GDP 成長率(末尾表 1-B-2-08 参照)

今回 7 月見通しでは今年の世界の成長率は 3.2%とされており、前回 4 月の 3.6%から 0.4%下方修正されている。これは 1 月の予測成長率 4.4%をさらに下方修正したものであり、半年間で大幅に改訂されている。1 月の見直しはコロナ禍の終息がずれ込んだためであり、4 月の見直しはロシアのウクライナ侵攻によるものと言えよう。そして今回はウクライナ紛争が長引き、米国、ロシア、欧州、中国の経済に陰りが見え、不透明感が増したことを織り込んだものである。

ロシアを除き主要経済圏或いは各国の GDP はいずれもプラス成長であるが、IMF はコロナ禍と対ロシア経済制裁によるエネルギー価格の上昇が世界経済に及ぼす影響が極めて深刻なものと受け止めており、4 月見通しをさらに引き下げている。

経済圏で見ると EU 圏の今年の成長率は 2.6%であり、4 月の 2.9%を 0.3%引き下げており、対

ロシア経済制裁の影響が大きいと考えられる。一方、ASEAN5 カ国は 5.3%で据え置いている。

国別では米国 2.3%、ドイツ 1.2%、日本 1.7%、英国 3.2%、中国 3.3%、インド 7.4%、ロシア▲6.0%である。中国は 2010 年代前半に二桁の高い成長率を続けてきたが、今年は 4%未満の成長率にとどまる見通しである。また EU 圏でこれまで堅調であったドイツの今年の成長率は EU の平均を下回っている。同国のエネルギーがロシアに大きく依存していることが影を落としている。

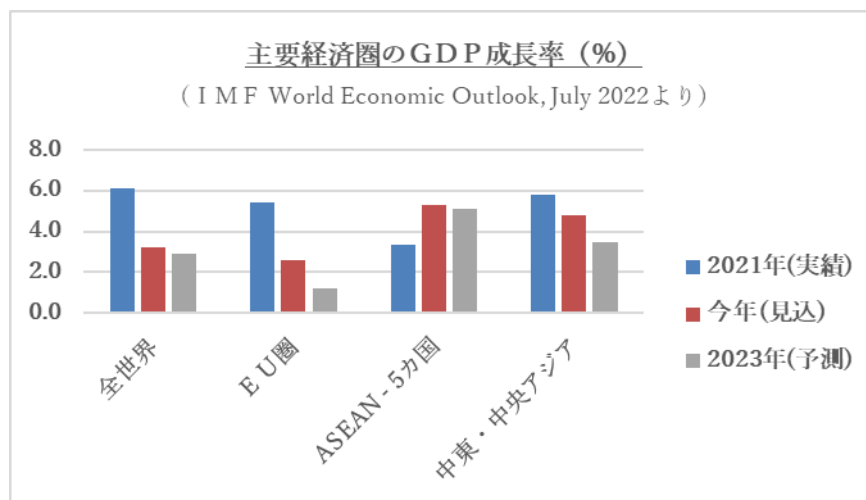
一方インドは 7.4%の高い成長率が見込まれ、またエネルギー価格の高騰を受けてサウジアラビアも 7.6%の高い成長率が見込まれている。これに対してロシアはサウジアラビアに並ぶ石油・天然ガスの生産国であるにもかかわらず▲6.0%のマイナス成長とされている。ウクライナ紛争の長期化による経済の悪化及び欧米諸国による経済制裁が大きく響くものと考えられる。

2. 2021 年～2023 年の GDP 成長率

主要な経済圏と国家の昨年(実績)、今年(見込み)及び来年(予測)の GDP 成長率の推移を見ると以下の通りである。

(プラス成長だが 2 年連続で低下する成長率！)

2-1 主要経済圏



全世界の 3 年間の成長率は 6.1% (2021 年実績) → 3.2% (2022 年見込) → 2.9% (2023 年予測) であり、昨年は景気回復の兆しが見られたが、今年及び来年はエネルギー価格の高騰、ウクライナ危機等により世界経済が大きく混乱すると考えられ、成長率は低迷する見

通しである。

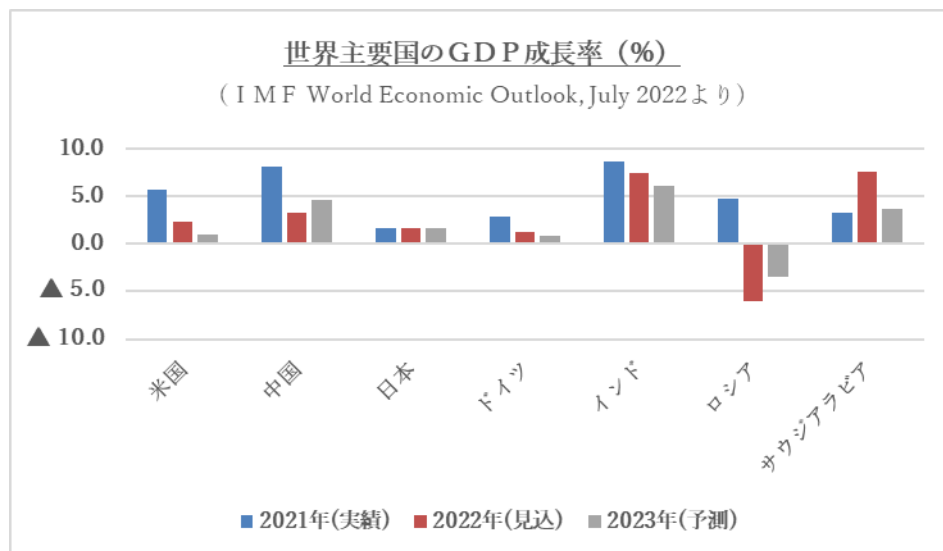
ウクライナ危機の影響を最も大きく受けるのは EU 圏である。3 年間の成長率も 5.4% (2021 年実績) → 2.6% (2022 年見込) → 1.2% (2023 年予測) であり、急激に成長率が鈍化すると見込まれている。ASEAN5 カ国の成長率は 3.4% (2021 年実績) → 5.3% (2022 年見込) → 5.1% (2023 年予測) であり、2021 年は世界平均或いは EU 圏を下回ったが、今年から来年は回復し、世界の成長センターになる勢いである。

中東及び中央アジアは産油・ガス国が多く、エネルギー価格の高騰により昨年は高い成長率 (5.8%) を示している。今年及び来年の成長率は 4.8% 及び 3.5% で、年々低下する見通しである。

但しそれでも世界平均或いは EU 圏を上回っており、IMF はウクライナ情勢を織り込んでエネルギー価格が引き続き高値に推移すると見ている。

(今年▲8.5%の大幅なマイナス成長になるロシア！)

2-2 主要国



米国の昨年の成長率は 5.7%であったが、今年(2.3%)、来年(1.0%)と連続して成長が鈍化する。中国は 8.1%(2021 年実績)→3.3%(2022 年見込)→4.6%(2023 年予測)であり、今年から来年には成長率が回復するものの、ごく最近まで二桁台の成長率を誇っていた頃に比べるとかなり低い。日本は 1.7%の低成長が続くと予測されている。中国とならぶ経済大国インドの成長率は 8.7%(2021 年実績)→7.4%(2022 年見込)→6.1%(2023 年予測)であり、高い成長を維持する見込みである。

中国、インドなどと共に新興経済国 BRICsの一翼を担ってきたロシアの成長率は対照的な様相を呈している。昨年(2021 年)こそは 4.7%の成長率を示したが、今年は一転して▲6.5%の大幅なマイナス成長が見込まれ、来年も▲3.5%であり、比較した国の中では唯一マイナスが続くと予測されている。ウクライナへの軍事介入が同国の経済に極めて深刻な影響を及ぼすことは間違いなさそうである。産油国サウジアラビアの 3 カ年の成長率は 3.2%(2021 年実績)→7.6%(2022 年見込)→3.6%(2023 年予測)であり、原油価格上昇の恩恵を受けている。

3. 2022 年 GDP 成長率見直しの推移

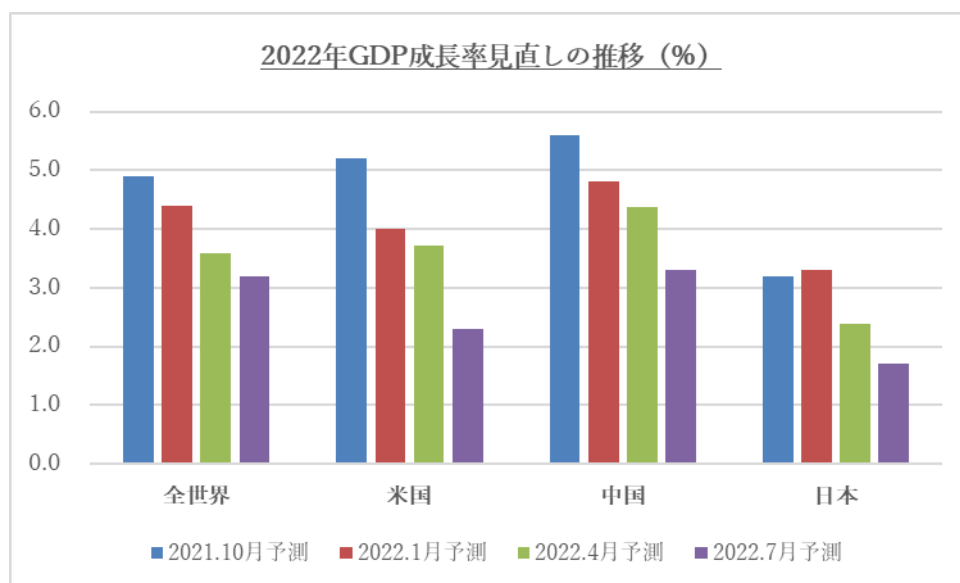
IMF の世界経済見通しは毎年 4 月、10 月に全世界 200 弱の国について成長率の見直しが行われ、さらに 1 月及び 7 月には主要な国と経済圏の成長率が発表されている。主要な国と経済圏については 3 カ月ごとに検証されていることになる。

最近の特徴はコロナ禍、ロシアのウクライナ軍事介入、エネルギー価格の激しい上昇と下落など国際経済を取り巻く環境が不透明感を増していることである。このため IMF の成長率見直しも 3 カ月ごとに大きく変動すると言う特徴が見られる。

ここでは直近 4 回(2021 年 10 月、2022 年 1 月、4 月、7 月)の成長率見直しの推移を比較する。

(10月以降4回連続で下方修正された世界、米国および中国！)

3-1 全世界及び日本、米国、中国の成長率見直しの推移



直近4回のIMF経済見直しにおける2022年の世界のGDP成長率は2021年10月見通しでは4.9%であったが、その後2022年1月は4.4%、4月は3.6%、7月(今回)3.2%と4回連続して下方修正されている。

米国も5.2%(2021年10月予測)→4.0%(本年1月)→3.7%(4月)→2.3%(7月)であり、今回の数値は昨年10月の予測値の半分以下となっている。中国の場合は、5.6%(2021年10月予測)→4.8%(本年1月)→4.4%(4月)→3.3%(7月)であり、比較した中では成長率は最も高いが、米国同様4回連続で下方修正され、今回の2022年成長率は昨年10月の予測値を大きく下回っている。

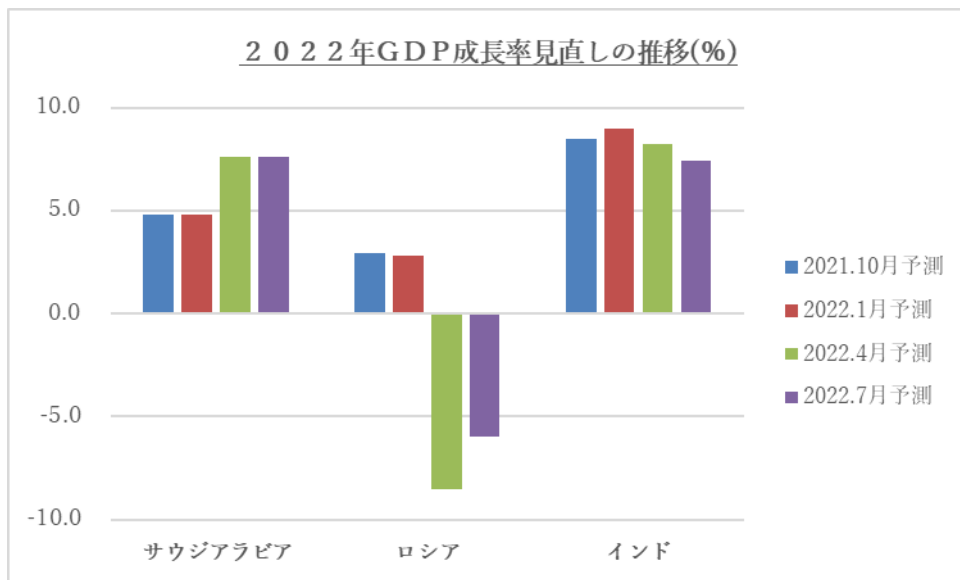
日本の2022年成長率の過去1年間の見直しは3.2%(2021年10月予測)→3.3%(本年1月)→2.4%(4月)→1.7%(7月)である。本年1月には成長率がほんのわずかながら上方修正されたが、その後続く4月及び今回の予測では成長率は連続して下落している。エネルギー価格の急騰は日本経済のアキレス腱であり、成長率が大きく下方修正されている。

(OPEC+の盟主に極端な明暗！)

3-1 ロシアとサウジアラビアとインド

サウジアラビアとロシアは米国と並ぶ三大産油国であり、両国はOPEC+(プラス)の盟主として最近の石油価格の高値安定を主導している。この結果、両国経済は安定し、昨年7月以降今年1月まで、2022年成長率はサウジアラビアが4.8%で変わらず、ロシアも小幅な変動にとどまっていた。

しかし4月の見直しではサウジアラビアが+7.6%と上方修正された一方、ロシアは▲8.5%のマイナス成長と大幅に下落しており、両国は極端に明暗を分けている。ウクライナ紛争により石油価格が急騰したことは輸出国のサウジアラビアに大きな追い風となった一方、紛争当事者のロシアは経済制裁の影響を受け今後に深刻な懸念がある。この傾向は今回7月の成長率予測でも踏襲され、サウジアラビアは7.6%の成長を維持する一方、ロシアは▲6.0%のマイナス成長である。



アジアの新興経済大国であるインドの2022年のGDP成長率予測は、8.8%(2021年10月予測)→9.0%(本年1月)→8.2%(4月)→7.4%(7月)である。4月、7月と連続して下方修正されたが、それでも今年の成長率は世界平均を大きく上回る見通しである。

以上

本稿に関するコメント、ご意見をお聞かせください。

前田 高行 〒183-0027 東京都府中市本町 2-31-13-601
 Tel/Fax; 042-360-1284, 携帯; 090-9157-3642
 E-mail; maeda1@jcom.home.ne.jp

MENAと世界主要国の GDP 実質成長率(2022-23年)

国名	2022年7月見通し(今回)			2022年4月見通し (前回)		前回/今回比較	
	2022年 成長率 (%)	2023年 成長率 (%)	増減	2022年成 長率(%)	2023年 成長率 (%)	2022年 成長率 (%)	2023年 成長率 (%)
全世界	3.2	2.9	▲ 0.3	3.6	3.6	▲ 0.4	▲ 0.7
米国	2.3	1.0	▲ 1.3	3.7	2.3	▲ 1.4	▲ 1.3
EU圏	2.6	1.2	▲ 1.4	2.9	2.5	▲ 0.3	▲ 1.3
ドイツ	1.2	0.8	▲ 0.4	2.1	2.7	▲ 0.9	▲ 1.9
日本	1.7	1.7	0.0	2.4	2.3	▲ 0.7	▲ 0.6
英国	3.2	0.5	▲ 2.7	3.7	1.2	▲ 0.5	▲ 0.7
中国	3.3	4.6	▲ 1.3	4.4	5.1	▲ 1.1	▲ 0.5
インド	7.4	6.1	▲ 1.3	8.2	6.9	▲ 0.8	▲ 0.8
ASEAN-5 ヶ国	5.3	5.1	▲ 0.2	5.3	5.9	▲ 0.0	▲ 0.8
ロシア	▲ 6.0	▲ 3.5	2.5	▲ 8.5	▲ 2.3	2.5	▲ 1.2
中東・中央アジア諸国	4.8	3.5	▲ 1.3	4.6	3.7	0.2	▲ 0.2
サウジアラビア	7.6	3.7	▲ 3.9	7.6	3.6	▲ 0.0	0.1